



取材協力
小坂建設株式会社
東京都杉並区阿部野原1-1
026-276-5115

撮影協力
国州おしぐらの家 やまもり家
東京都中央区日本橋2-20-6
026-267-2641 (9時~18時)

触れてみて初めて知る、手づくりの心地よさがある

——日本の住宅は職人さんの技術で支えられているんですよね。みんながよい物を造ろうと思ってるのは一緒だから、色んな方法があってもいいと思います。伝統構法はただの間ではなくて、手間を掛けるからいい物が出る。そういう価値は忘れてはいけないですね。

柳澤 茅葺きの屋根も今は見なくなつて、残つていてもトタン屋根を乗せていたり。茅葺きはもちろん、土壁や材木も煙で燻すことで丈夫になつていたり、長持ちする。

戸谷 昔は機械もなかったから、手で土を混ぜていたけど、人間の勤めたいのも大事。手間をかければそれだけ良くなるし、僕ら

も納得のいく仕事をしていきたい。

——時間もお金もかけないのが当たり前になつてますよね。でも、いい物は、実際に自分の肌で感じてもらえばわかるから、知らないだけかもしれない。

戸谷 伝統構法の家に住んだ人は「よかつた」と言ってくれるもね。

勝野 そうそう、法隆寺なんかもそうだけど、1400年も前の木造建築が残っているなんて他の国を探してもない。そこには職人の技術が残っている。日本にはやっぱり木の文化が根付いていて、住んで「いいなあ」と感じるのは当たり前だよ。

宮入 もっと多くの人にまずは知ってもらいたいね。見えない価値を知らない、伝統構法という選択肢も生まれにくいからね。

——見えない価値、というのがキーワードですね。こだわればそれだけの手間も生まれるかもしれないけど、それだけ家づくりも楽しくなりそう。

小坂 材木に付けた墨も「思い出だから」って、お施主さまの希望で消さないまま建てたり…手作業でやってるからこそ、想いを残すことができるんです。

——想いを残す…。この会場も150年の古



和室のふすまと壁は、飯山で作られる手書きの内山和紙を土壁に貼ってきたもの。とても美しく、優しい風合いの空間に仕上がる

民家ですが、今もこうして人が集つて楽しんでいるつてすごいことですよ。

住む人の想いと一緒に家を残すためには、伝統構法を担う職人さんたちの技術が欠かせません。そういった素晴らしい家が今も残ることを多くの人に知ってもらいたい、家づくりの出发点に立つてほしいです。

ただの飾りじゃない、守つていくべき技術



——古民家が残りに残ってきた理由を改めて考えると、家づくりの原点は構法にあると。

戸谷 土壁の家も珍しくなつてきてね。土壁が何よりいいというわけじゃないけど、防火性が高く、温度・音を伝えにくい、湿気の調節をしてくれたり、匂いを取ってくれたりすると言われている、これに勝るものはないと思う。だけど、工期短縮でだんだんと使われなくなつてきたよ。

だからこそ、もっと若い人たちにも伝えて守つていかなきゃいけない技術。

——土壁って、少し寒そうないイメージがあるのですがどうなんですか？

戸谷 土壁は夏は涼しく、蓄熱もするので一度部屋を温めると、冬でも意外と暖かいよ。あとは土の量でも調整できる。

——実際につくる家では断熱材を入れないお宅もあるとか。温度を一定に保つと、体にも負担がないですね。

戸谷 土と耐火ボードを使った家では、家に入ったときの空気が全然違うよ。

丸山 昔ながらの土壁には藁と粘土土が計算されて配合されていて、普通の壁よりも厚みがあり、壁が息をするように湿気を吸ってくれたり自然に機能してくれる。土の匂いなんかも感じながら塗ってます。

——人間も、自然ですもんね。やっぱり土壁は落ち着くんですね。



天然素材100%でできた畳[藁床(わらど)]の和室。土壁同様、室内の湿気の吸放出はもちろん、使っていくうちに適度に弾力を持つため心地もよい

丸山 ビルなどの左官もやっていたことがあるが、自然を扱う伝統構法は楽しいですね。

柳澤 僕も、小さいときから憧れだった大工という仕事を志していく中で、素材にこだわった家の魅力を感じるようになりました。感覚や実際に目で見てみないとわからないような落ち着く感じとか。

伝統構法を担う職人になるには、最低でも10年の修業が必要なんです。そういった職人に安心して家づくりを任せられるのも伝統構法だと思います。

小坂 コスト面が重視されがちですが、やっぱり昔から残っている家を目の当たりにすると、昔からの地元の工務店の技術つてすごいなと。木そのものを生かす建築というか。そういう部分に価値を感じます。

——なんでも手間をかけない傾向にあるんですね。宮入 だけど、いい物を後世に残していくには、手間をかける大切さが欠かせない。昔の人は草取りもまめにしていたんだよね(笑)

勝野 木材も昔は全部自然乾燥だったんだ。海外では伝統構法はすごく称賛されているのに、コストや時間の面でだんだんと減ってきている。長野には素晴らしい資源があり、需要と供給のバランスもとらないといけないので難しいが、世界にも誇れる技術は、残していかないといけないよ。

——木造建築における木は飾りじゃない。宮入 庭も同じで。コストや手間を省きたいから、だんだん簡素化されていき、大きくならず、虫がつかなくて手入れが楽な庭が求められるようになってきました。それって自然というより、作り物みたいで少し寂しい…。小すくを出して手間をかけるから愛着が湧いてくるんだよね。

昔の人は庭の手入れもやっていたけど、核家族化など日本人のライフスタイルの変化に伴つて、庭の手入れもされなくなつてきた。庭に対する想いは薄れてきたのかな。

山に生えている雑木が人気だけど、15年とか経つと住宅の基礎の下に入り込んだり、排管を持ち上げちゃったりなんという問題も出てきている。家同様に、今が良ければいいんじゃない、この先つと受け継いでいけるような庭を作っていきたいよ。